

「学問と日常の間で」

東京大学大学院言語情報科学専攻

李 在昶

私はしばしば痛感することがある。それは、人文学の研究者として学問の場で考えていることと、日常生活のなかで無意識に取ってしまう態度との間の、少なからぬ隔りである。研究においては、何が倫理的に正しいのか、あるいはどこに論理的な欠陥があるのかを言葉によって問い、時には研究対象や社会の風土、制度に対して厳しい視線を向ける。しかしその一方で、日常の自分を振り返ってみると、知らず知らずのうちに他人に対して非理性的な偏見を抱いたり、無自覚に思いやりを欠いた振る舞いをしてしまったりすることがある。そのたびに、学問を通して考えているはずのことが、生き方そのものに十分結びついていない、その乖離に突き当たってしまう。

このような学問と生活との間のずれや視野の狭さは、私にとって常に付きまとう課題であった。その隔りを少しでも埋めていく上では、自分のなかにある先入観や思い込みを絶えず疑い、反省し続ける習慣が必要であろう。そのためには、慣れ親しんだ環境や限られた人間関係のなかに閉じこもるのではなく、むしろ異なる背景を持つ人々や、自分にとって馴染みのない環境に身を置くこと、そして日常の外にある多様な価値観と出会い続けることが大切だと思う。

その意味でこの1年は、私にとってかけがえのない時間であった。さまざまな国から来て、専門分野も関心もまったく異なる奨学生のみならず、そして渥美財団の関係者の皆さまと出会い、多くの場を共にすることができたからである。誰に対しても明るく、自然に気遣いを示し、相手の話に真摯に耳を傾ける方々の姿に触れるたび、自分のものの見方の狭さや、人との関わり方の未熟さを省みる機会を与えられた。だからこそ、皆さまと過ごした時間は、単に楽しく会話をし、おいしい食事をいただく時間以上の意味を有した。

また、財団が用意してくださったさまざまな行事も、私の視野を広げてくれた。トンネル建設現場の見学や野外でのバーベキューなど、普段の留学生活だけではなかなか経験できない体験を通して、自分の研究や日常とは異なる世界に触れることができたのは非常に貴重であった。とりわけ印象に残っているのは、年に2度行われる研究発表会である。自分の生活圏ではまず接することのない分野の研究発表に耳を傾けることで、自分の研究がいかに限られた領域のなかで行われているのかを改めて実感した。同時に、それぞれ異なる分野で真摯に研究に取り組む奨学生の方々の姿に大きな刺激を受けた。

日本での留学生活も3年を超え、日々の生活はある程度安定し、自分なりの生活のリズムも固まりつつあった。その分、人間関係や行動範囲も次第に固定化し、新鮮な刺激に触れる機会は少なくなっていたように思う。そのような時期に、財団が提供してくださった交流と学びの場は、凝り固まりかけていた自分の感覚を揺り動かしてくれる大切な契機となった。

私は1年前、渥美財団に提出した自己紹介のなかで、安定した環境を好む自分の性質を乗り越えるため、

新しい経験や挑戦を意識的に求めていきたいと書いた。実際のところ、今でも私は見知らぬ場や初対面の人々に対して緊張しやすく、そうした性格を完全に克服できたとは言えない。それでも、この1年で得た経験は、これから韓国と日本のあいだを行き来しながら、より広い場で活動していこうとする自分にとって、確かな土台になったと感じている。研究においても生活においても、自分の限界を知り、その限界を少しずつ広げていくための姿勢を、今後も大切にしていきたい。そして、いただいた学びと刺激を、これから少しずつでも周囲の人に還元していければと思う。